

エンディング

『狂乱の病院』（タケシ投票）

「ぼ、ボクじゃないですよ～」

最多投票によってバナナを食べた犯人はボクになってしまった。ボクにはある秘密がある。それはボクには筋肉ムキムキの生霊が取り憑いていることだ。メガネを外すと、第二の人格としてその生霊が現れる。そうすると筋肉が肥大し、シャツが弾け飛ぶ。生霊が現れると、そのときの記憶をなくしてしまう。

ボクにはそいつを制御しきれないんだ。記憶が失っている間、もしかしたらボクではないボクがバナナを食べてしまったのだろうか……。

ボクは…ボクは…。

「うっ…」

「お、おい！！ なにがどうなってんだ！」

「ウびゃっあ

あ
..... |

病室で一人もだえる山田タケシ。彼の筋肉は次第に肥大し、そして筋骨隆々の化け物となってその正体を現した。

「オテゝ ハンニン シゝヤナイ……」

「ヤバイデスヨ ミナサーン ニゲマショー」

「タケシ……俺は…お前を…救えなかった……」

苦悶の表情を浮かべるわさお。タケシに対して何か特別な感情を抱いているようなそんな表情だ。

「マッハオマエ」

タケシ（筋肉）がその巨大な右腕を振り払う。極悪男はその強烈な一撃に反応できず、吹き飛ばされてしまった。その凄まじい衝撃によって、極悪男は病室の壁にめり込む。

病院内は狂乱の騒ぎとなった。もう誰も彼を止めることなどできない。我々は選択を誤ってしまったのだ……。 (BAD END)

"ህልሜ" (アベベ投票)

"ሶና እኔ ሃኒን ያናይኔ ነኝ ~"

እኔ አይደለሁም ጥፋተኛው። እርግጥ ነው፤ ጥፋቶቼ እንዳሉ አውቃለሁ። አንድ ሰው መጀመሪያ ማስተዳደር የነበረብኝን ሙዝ በልቶ እንደነበር ግልጽ ነው። አሁንም ሙዝ አልበላም በጣም ስግብግብ ነኝ። ዋሳኦ ለፖሊስ እየደወለ ይመስላል። ሙዝ ያለፈቃድ መብላት ወንጀል ብቻ ሳይሆን የተሸከምኩት አውቶማቲክ ሽጉጥ መሆኑን እርግጠኛ ነኝ።

ከዚያም በፖሊስ ተወሰደኝ። ምርመራው ለአምስት ሰዓታት ያህል ቆይቷል። እዚህ ሆስፒታል እስክታከም ድረስ የሆነውን ሁሉ ነግራችኋለሁ። የትውልድ ከተማዬ የኢትዮጵያ ሪፐብሊክ ነው። አባቴ በአደገኛ ዕፅ አዘዋዋሪነት በልጅነቴ ታስሮ ነበር። አንድ እናት፣ ሶስት ወንድሞች እና አራት እህቶች አሉኝ። ቤተሰቤ መቼም ሀብታም አልነበረም።

ከትንሽነቴ ጀምሮ ህልም አየሁ። የNBA ተጫዋች መሆን ነው። እና ብዙ ገንዘብ ማግኘት እና ቤተሰቤን ምቹት ማድረግ እፈልጋለሁ። በእጄ የተሰራ የቅርጫት ኳስ ግብ አወጣሁ እና ምንም እንኳን ወጣት ብሆንም በየቀኑ የቅርጫት ኳስ ተለማምሬያለሁ። እንደ እድል ሆኖ፣ የቅርጫት ኳስ ችሎታም አለኝ፤ እናቴ በየቀኑ ለምታቀርበው ምግብ ምስጋና ይገባውና ብዙ ማደግ ችያለሁ።

"እናቴ, ወደ ጃፓን እሄዳለሁ."

ልክ በዚያ ቀን አንድ የጄት አውሮፕላን ወደ ጃፓን ሊነሳ ነበር። ይህ የመጨረሻ እድሌ ነው ብዬ አሰብኩ እና በአውሮፕላኑ ቀኝ ክንፍ ተያዝኩ። ከዚያ በኋላ ምን ያህል ጊዜ ቆይቷል? ራሴን ስቼ በጄቴ የቀኝ ክንፍ መያዙን ቀጠልኩ። ጃፓን መድረስ ቻልኩ። እና በጃፓን ውስጥ ላሉ ሰዎች ሁሉ ደግነት ምስጋና ይገባውና አሁን በጃፓን መድረክ ላይ የምወደው የቅርጫት ኳስ መጫወት ችያለሁ።

ይሁን እንጂ ሐልሜ ያበቃ ይመስላል.

"ወደ ሀገር ትሰደዳላችሁ!"

ወደ ትውልድ መንደሪ ሊትዮጵያ ልመለስ ነው። የቤቴ መንገድ በጣም ረጅም ጊዜ ተሰማው። በመጨረሻም ቤተሰቤን የመመቻቸት ህልሜን ማሳካት አልቻልኩም። ከባድ እግሮች አሉኝ. ቤት መሄድ አልፈልግም። ቢሆንም፣ እግሬ በቀጥታ ወደ ቤተሰቤ ወደ አሮጌው የተዘጋ ቤት መሄዱን ቀጠለ። የቤቴን በር ከፈትኩ። አለ

"እንኳን ወደ ቤት መጣህ ኒ-ቻን"

"እንኳን ተመለስክ ወንድም"

ከፊቴ የሚወደኝ እና በጣም የሚወደኝ ቤተሰብ ነበረኝ።

"ይቅርታ ህልሜን እውን ማድረግ አልቻልኩም።"

ደጋግሜ አለቀስኩ። ማልቀስ፣ ማልቀስ እና ሁሉንም መልቀቅ ፈለግሁ።

"ምንም አይደለም አበበ፣ በሰላም በመመለሻችሁ ደስተኛ ነኝ።"

"እመሰግናለሁ እመሰግናለሁ እናት..."

አለም ታላቅ የ NBA ተጫዋች አጥታለች። ይሁን እንጂ ገንዘብ ብቸኛው የደስታ መንገድ አይደለም። አበበ በጃፓን ያደረገው ረጅምና ረጅም ጉዞ ይህንኑ አረጋግጧል።

“ኒኢ-ሳን፣ የቅርጫት ኳስ መጫወት ትፈልጋለህ?”

"እንድ ደቂቃ ቆይ ኢማሃታ ስራውን ይጨርሳል።"

ከዚያ በኋላ ሦስት ዓመታት አልፈዋል። የኤንቢኤ ተጫዋች የመሆን ህልሜን ተስፋ ቆርጮ ነበር፣ ግን ምርጫው ፈጽሞ አልተቆጫኝም። ከምወደው ቤተሰቤ ጋር በመሆኔ ደስተኛ ነኝ።

"ኒኢ-ሳን፣ ወደፊት የኤንቢኤ ተጫዋች መሆን አፈልጋለሁ።"

"አየዋለሁ... ጩካኝ መንገድ ነው..."

"እንደ ወንድሜ መሆን አፈልጋለሁ."

"...አመሰግናለሁ."

"አረ ወንድሜ!! የምችለውን ሁሉ አደርጋለሁ!!"(ደስተኛ? መጨረሻ)

[グーグル翻訳](https://translate.google.co.jp/?hl=ja&tab=TT) (https://translate.google.co.jp/?hl=ja&tab=TT)

『叶わぬ恋』（わさお投票）

「そうだ、俺がバナナを食べた…」

俺は犯人ではない。それでもそう言うことで全てが丸く収まるのならそれで良かった。俺には一つ秘密があった。

それは…山田タケシという一人の人間を愛してしまったこと。

俺は生まれたときから犬だった。でも人間の言葉は話せるし、ちゃんとした思考もできる。それでもやっぱりこの見た目のせいか、たくさんの人から偏見の目でみられた。だけど山田タケシだけは違った。

彼だけは俺を普通の人として見てくれたんだ。俺はそれがうれしかった。だから彼が何かを隠しているようだったが、俺が彼を守らなきゃと思ったんだ。

胸が苦しかった。心が張り裂けるような気持ちだった。俺はこの病院に来て、初めて恋を知ったんだ。

「けっ、おめえが犯人かよ」

「カッテニ タベルノ ヨクナイネ」

極悪男とアベベの視線が俺へと刺さる。俺は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「ちょっと待って下さい、みなさん」

そのときタケシの張り上げた声が病室に響く。

「たかがバナナぐらいで喧嘩することもないじゃないですか！」

「タケシ…」

「みんなちょっと冷静になってください。バナナの一房ですよ？ 病院の購買でも買えるじゃないですか？ そもそも僕らは争う必要なんてなかったんだ……」

病室にいる皆はタケシの言葉に納得するように頷いた。タケシはポケットの中から硬貨を一枚取り出した。それは100円玉だった。

「これはボクのなけなしのお金です。今からこれを使ってバナナを買いにいきませんか？」

みんなの目が驚いたようにタケシの元に張り付いた。やっぱりタケシはものすごく良い奴だ。どんな時も冷静で、みんなのことをよく見てくれる。俺に対して偏見がないのも、きっとそういう根の部分に影響しているのだろう。

気持ちを伝えるのが怖い。こんな人じゃない形の生物に好意を伝えられたら、彼は俺の気持ちを真っ直ぐ受け入れてくれるのだろうか。どうしようもなく怖いんだ。ああ、もちろん彼がとてつもなく良い奴だってのはわかる。だけど、それでも、拒絶されたらと思うと、怖くてたまらないんだ。

「ショウガナイデスネ ワタシノオカネモ ツカッテ」

「アベベさん…」

「まあ…そういう流れっていうんだったら、しゃーなしだ。俺も出してやるよ」

「悪男さん…」

最後にみんなの目がこちらを向いた。みんなは俺を犯人だと思っているのに、どうしてこんなにも優しいのだろうか。

「わさおさん。バナナを食べてしまったことはしょうがないことです。きっとお腹がすいていたんですよね？」

「あ、ああ」

「でも勝手に一人で食べたのは良くなかったです」

「…みんな申し訳ない…」

タケシの手が俺の手を握った。細身で、色白で、少し衝撃を与えてしまったらすぐに折れてしまいそうなそんな柔そうな手。それでもそこに伝わる温度は、確かに温かい。

「これからみんなでバナナを買いに行きましょう」

「タケシ」

「四〇〇円も集まればきっといいバナナが買えますよ！！ ほら！！」

ああ、俺はやっぱりタケシのことが好きなんだ。大好きなんだ。

「ヨシ イマカラ イクネ～」

「ほら、わさお。さっさとしろな」

生まれて初めて恋をした。こんな身体だったから、そういうものとは縁がないと思ってた。
それでもタケシの優しさに触れて、初めてそういう感情があることを知った。性別なんて関係ない。生まれたカタチなんて関係ない。この思いを吐き出したい。タケシに好きだと伝えたい。

それでも、それでも…。

「行きますよ！ わさおさん！」

俺は、この世界が、俺をこんな姿に生んだこの世界が……大嫌いだ。（Normal END）

『極悪人の末路』（極悪男投票）

「お前が犯人だろ！」

わさおが俺に向かってそう言った。俺が犯人か、だって？ そんなの決まってるだろ。

「あははっはははははは！ 最高にうまかったぜ。あのバナナ！ 口にとろけるあの甘み。あぁーあ、お前らにも分けてやりたかったなあ！？」

皆が驚愕したような顔をその表情に貼り付けて、俺を見ってくる。ほんとざまあねえな。この世界はどうせ正直者が馬鹿をみるんだ。

俺は生まれたときから髪の毛が薄かった。それに人相も悪かった。目が悪くて、目を凝らしてないとともに前も見えやしねえ。そんな生まれ持ったこの凶悪な顔のせいか、俺の人生はとことんクソだった。

小さいときは偏見に負けてたまるかと、いろんな善行を繰り返した。それでも世間の俺を見る目は何も変わらねえ。どうせ俺が悪だと決めつける。俺は何もしていないのに、やってそうな顔つきだからとすぐに疑われる。

もうどうすればいいんだよ。こんな顔のせいでまともに働けない。まともな友好関係すら築けたことがない。俺は天涯孤独で、何も恵まれなかった。

だから俺は変わろうと決意した。見た目通りの極悪人になろうって。正直者が馬鹿を見るこの世界で俺が生き残る唯一の方法はそれだけだったんだ。

「どうしてそんなことを！」

「ヨクナイネ ソレ」

「うるせえ…」

うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。

「おめえらに俺の何がわかるんだよ！！ どうせ最初から俺を疑ってたんだろ？ ああ、そ
うだよなあ。元からこんな顔つきだからよ。怪しくもなるよなあ！」

「もしかして俺の財布の金を盗んだのも…」

「ああ、そうだよ。それも俺がやった。どうだ悔しいか？ このクソ犬め！」

「こいつ…！！」

俺は一つのことを思い出した。そういえばアベベの机の引き出しの中に拳銃が入っていたこ
とを。俺はすぐさま走り、アベベの机の引き出しの中から拳銃を取り出した。

「ソレ ワタシノ ハンドガン」

「うるせえ。殺されたくなかったらそのくせえ口を閉じやがれ」

「悪男さん。やめてください。せっかく僕たち仲良くなったんですから」

「黙れ！ いつ俺がお前らと仲良くなった！？」

わさおは反撃の機会を狙っていた。今にも噛みつきそうな怒りの表情で俺のことをにらめ付けていたのだ。そしてわさおは俺の脚に向かって、飛びかかる。

「おい！！ やめろ！！ はなせ！！」

わさおは必死に俺の足に噛みつき、振り払われまいと耐え続けた。

「わさおさん！」

しかし俺も負けじと抵抗を続け、壁へとわさおを振り飛ばした。

「わんっ！」

「ワサオサン ダイジョウブデスカ？」

その後、一番脅威になりそうなので、アベベの脚を狙って銃弾を放った。もちろんそれでは致命の一撃にはならない。そうしなかったのは、俺なりの世界に対する抵抗心だった。

人を殺してしまったら、俺の人生は本当に…本当に…終わってしまう。

「ぎゃはっはっは！ ざまあねえな。ま、命だけは取らねえからな！」

「許さない……許さない」

そう震える声で言ったのはタケシだった。この中で一番貧弱。きっとそこで気絶寸前の犬よりも弱い男だ。

「何を許さないって！ ってかお前に何ができるんだよ、貧弱男！」

「黙れ、お前はいまボクの逆鱗に触れた」

タケシは眼鏡を外した。すると途端にタケシはうずくまり、そしてみるみるうちに筋骨隆々の筋肉達磨がその姿を現した。

「オエワルヤツ」

「ひい…来るなあ」

あのとき廊下ですれ違った化け物だった。今にもあのときの記憶を思い出して、また失禁してしまいそうだった。本能的な恐怖で、ヤツに対して俺は為す術もない。極悪人になろうと思っても、やはり俺は小悪党止まりなのだ。今は、震える脚を押さえるので精一杯だった。

「これ以上来るなら、撃つぞ」

「フ°ロテイン…フ°ロテイン」

俺はハンドガンのトリガーに指を掛けた。そしてやつの心臓を目掛けて、その一撃を放った。しかしまるで何事もないようにハンドガンの弾をその化け物は弾き返した。

「デ°ータナカネヨ」

「ひい」

俺は何発も銃弾を放った。その内の一発は彼の胸板を反射し、運悪く病室の大きな電子機器に命中する。大きな火花が散った。その火花はベッドに飛び散り、やがて大きな炎となった。俺が気絶して倒れる頃には病室は燃えさかる火炎に包まれていた。

「ここは……」

「おやおや、やっと起きましたね。ここは警察病院ですよ。あなたが病院で事件を起こしてから半年ほどが経ちました。身体の数カ所がひどい火傷に覆われていましたよ」

「そうか……他のみんなは…」

「やはりあなたは聞いてた以上に悪人ではないみたいですね」

「は？」

「おほん、いいえ。あの日、病室にいた患者たちはみな無事でしたよ。どうやら病室が完全に燃えるまでに筋骨隆々な男がみなさまを助けたそうです。もちろんあなたもね」

「そうだったのか…」

ここは警察病院だというが、どうやら俺は容疑者として送検されていたらしい。まあそれも当然か。アベベに関しては銃を放っちゃったわけだから。

「いってえ」

というか顔面がいてえ。何だよこれ。俺は顔面の痛がゆさに我慢できず、指を顔に伸ばそうとする。

「おやおや、まだまだお顔は安静にしておいた方がいいですよ」

「安静？」

「あなたは特に顔にひどい火傷を負っていましたからねえ。無論、私の手に掛ければそんなものすぐに直りますが」

「どういうことだ？」

「まあ、これに関しては見てもらったほうがいいでしょう」

医者ハンドミラーのようなものを取り出し、俺へと突き出す。俺はその鏡を受け取り、おもむろに顔を映し出した。

「なんだよ…これ…」

「まあ、もとの顔はかけらもなくなっちゃいましたね。そこに関しては本当に申し訳ないです。ですが生理的な機能に関しては何も問題ありません。まあこれに関してはもう少し観察が必要ですがね」

普段は泣かない俺だが、一筋の涙が俺の新しい頬に伝わったのがわかった。鏡に映った俺は見たこともない自分だった。決して美形というわけではない。違和感のある部分も少なからずあるので、人によっては俺の顔は不気味にも映るかもしれない。

だけどころなにも晴れやかな気分になったのは生まれて初めてだった。

「ありがとう、本当にありがとう…」

「そこまでお礼を言われるのは悪い気はしませんね。まあしばらく安静にするんですよ。退院したら、しっかり罪を償うのです」

鏡にはあの頃の凶悪な顔は映っていなかった。何もかも綺麗さっぱり消えていた。

俺は生まれ変わったんだ。何年ぶりの感謝の言葉だっただろう。医者が病室から消えて、俺の眠気が限界になるまで、俺は何度もそう呟き続けた。（True End）

『私の夢』（アベベ投票 翻訳ver）

「ソンナ ワタシ ハンニンジャナイネ〜」

私は犯人ではありません。もちろん、私にも落ち度があることはわかっています。私が管理しなければならぬバナナを誰かに食べられてしまったことがまず何よりの原因であることは明白でしょう。

それでも私は欲に眩んで、バナナを食べることなど一切していません。

わさおさんが警察を呼んでいるようです。バナナを勝手に食べた罪だけでなく、きっと私が所持していた自動拳銃のこともあるのでしょう。

それから私は警察に連行された。取り調べは五時間にも及んだ。私はここに入院するまでの経緯を全て話しました。

私の故郷はエチオピア共和国です。父親は麻薬の密売によって私が幼い頃には刑務所にいました。私には一人の母親と、三人の弟、四人の妹がいます。決して私の家は裕福とは言えませんでした。

私には小さいころから一つの夢がありました。それはNBAプレイヤーになるということです。そしていっぱいお金を稼いで、家族を楽にさせてあげたいのです。手作りのバスケットゴールを作り、私は幼いながら毎日たくさんバスケの練習をしました。幸い私にはバスケの才能もあり、母親が作ってくれる毎日のごはんのおかげでこんなにも大きく成長することができました。

「母さん、おれ日本に行ってくる」

ちょうどその日、日本に向けてジェット機が飛び立とうとしていました。私はこれが最後のチャンスだと思い、ジェット機の右翼に捕まりました。それから何時間経ったでしょうか。私は意識を失いながらもジェット機の右翼に捕まり続けました。何とか日本へたどり着くことができました。そして日本の親切なみなさんのおかげで、日本という舞台で大好きなバスケットをすることができるようにもなりました。

ですが、私の夢もどうやらここまでみたいです。

「お前は国へ強制送還だ！」

私は故郷であるエチオピアへ帰ることになりました。家への帰路はとても長く感じました。家族を楽にしてあげたいという夢をついに私はかなえることはできませんでした。足が重い。家に帰りたくない。それでも私の足はひたすらまっすぐ家族のいる古いオンボロな家に向かっていました。家の扉を開けました。そこには、

「に一ちゃん、おかえり」

「おかえりー、おにい」

私の目の前には私が大好きで、大好きでたまらない家族がいました。

「ごめん、おれ。夢かなえれなかった」

何度も何度も私は泣きました。泣いて、泣いて、全てを吐き出したかったのです。

「いいのよ、アベベ。私はお前が無事に帰ってきてくれただけでうれしいよ」

「ありがとう、ありがとう、母さん…」

世界から偉大なNBAプレイヤーが一人消えました。それでも幸せという形は何もお金だけではないのです。アベベの長い長い日本での旅路はそれを証明してくれました。

「にいさん、バスケやらない？」

「おう、ちょっと待ってな。今畑仕事終わらせてくるから」

あれから三年が経ちました。私はNBAプレイヤーになるという夢は諦めましたが、それでもこの選択に悔いはありませんでした。大好きな家族と一緒にいられるだけで、私は幸せなのです。

「にいさん、俺将来NBAプレイヤーになりたいんだ」

「そうか……険しい道だぞ……」

「おれ、にいさんみたいになりたいんだ」

「……ありがとう。よし、それじゃあ今日から毎日八時間は練習するぞ！！」

「おう！ にいさん！！ 俺頑張るよ！！」（HAPPY？ END）